

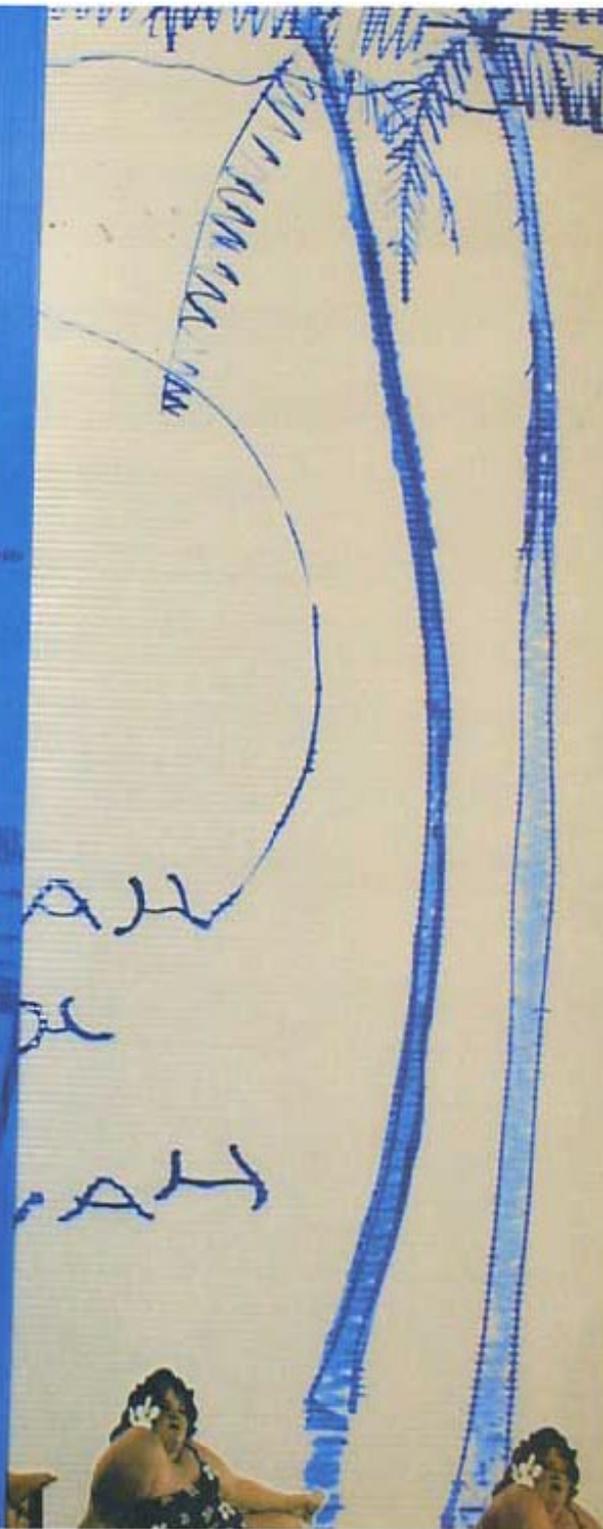
六花

俳句雑誌

りつか

5

designed by Tamako Tanaka



訪
戴



山田六甲

さくら桃もももさくら花筏
花疲れ唇に泡カプチーノ
麦青む筑後の筑後平野かな
落椿水棹寝かせて橋くぐる
高枝に鵲の巣を作りゐる
台湾の人が冷やかす舟遊び

黄
梅
の
柳
川
に
根
を
な
だ
れ
咲
き
這
ひ
這
ひ
の
人
形
も
雛
飾
な
り
菜
の
花
を
食
べ
散
ら
か
し
て
鶯
鳥
か
な
舟
遊
び
女
座
り
を
す
る
を
み
な
菊
桃
に
立
寄
る
先
を
忘
れ
た
り
あ
あ
こ
れ
が
ト
キ
ワ
マ
ン
サ
ク
だ
つ
た
の
か
背
水
の
陣
な
り
ボ
ー
ト
漕
い
で
を
り

無鑑査同人作品

六 卿 集

(五十頁送り)

旧正月

小田

元

下萌や古くなつても新幹線
ヴイトンでも邪魔になります春の風邪
父さんと気安く呼ぶな旧正月
講釈をいっばい聞いて比良八講
竹串の尖焦げている梅見茶屋

鳩

梶浦玲良子

短景や西へと急ぐ人の影
 御破算で願ひましては鳩の岸
 冬眠の亀の真下を通勤す
 一湾を一重瞼の時雨過ぐ
 戒名の妻への賀状書きにけり

落椿

木内美保子

種袋小さき命の音たてて
 流れ藻の影を流して水温む
 地団駄踏んでゐるのか残る鴨
 梅園や寢息を乗せて乳母車
 独楽の如舞うて瀬を越す落椿

栗の花

中村 房枝

永き日のもたれ甲斐ある壁ありぬ
 神木に日も夜も瀬音つばくらめ
 平なる土につまづき栗の花
 蓮見の半歩を人に譲りたる
 櫛買うてもらふ約束蛍の夜

枯木星

鳴海 清美

初夢や宮様方の真ん中に
 恋の句のひとつもなくて寒薔薇
 北吹けり窓辺に鉢の花の彩
 岩山の声あぐるかも月冴ゆる
 隧道の果てたるところ枯木星

春の電

二瓶 洋子

喜寿となる屋根に融雪装置かな
両の手に左手のみの手袋を
妖艶な猫に遇ひけり雪の寺
豆を撒く贖金づくりはびこる世
晩年の大詰めとなる春の電

こどもの日

松山 律子

鮎はねて人間直立歩行する
亡き母の生まれた日ですこどもの日
母の日や著者進呈と云われても
袋角 コレステロールに善と悪
弔笛一発流れ藻の見え隠れ

初夢や宮様方の真ん中に

鳴海 清美

恋の句のひとつもなくて寒薔薇

北吹けり窓辺に鉢の花の彩

岩山の声あぐるかも月冴ゆる

隧道の果てたるところ枯木星

作者の緊張感と喜びや戸惑いが伝わってくる句。

国民の誰しもが宮家へのあこがれを持つと思うが、一方では宮様方の公務の大変さ、宮中のしきたりの重厚さなど、庶民には遠い存在である。そんなこんなで正月行事への思いも併せて初夢になったのである。決して不遜な考えで作った句ではない。

同人作品

檀木集



石たたき

田中 武彦

また庭の雪間に現るる石たたき
クロツカス泥をつけたる花を上ぐ
日と影の妻の歳月足袋を干す
一枚の墨の滲める賀状かな
黒髪は少数派なり成人式

梅が香

武田 美雪

冴返る熱血の師の逝かれけり
紅梅や開きて紅の薄れたる
掃きよせしものより梅の香立つ
梅が香や垣根を越えて移りたり
白梅や^m香を囲ふ

梅の香

中野 哲子

梅の香や楯ともならず裁ち鋏
ペン皿にある爪切りや春浅し
一輪といえども梅の香りかな
妹の記憶違いよ ヒヤシンス
結球の力不足に春キャベツ

菜根譚

六甲



クロッカスは秋植えの球根類。冬の間地中にあつたが春とも勢いのびてきて花をつけた。勢いよく伸びたものだから、土まで持ち上げたのだというのがよく解る句。

柔肌に雪の吸ひ付く露天風呂

西塚 成代

柔肌は文字通り（女性の）やわらかな肌。与謝野晶子が「柔肌の熱き血潮に触れもみで……」と詠んだことで周知の言葉。その柔肌に雪が吸ひ付くと作者は感じた。読者は雪になつたような錯覚でこの句を味わうのである。季語が「雪」で冬ではあるが、どこか春の雪の心も含んでいようだ。

桶に波立ちており春一番

延川五十昭

春一番のありようを、水桶でとらえたのは手柄。春一番が吹くまでは、水と聞いただけで、言っただけで、寒く感じたけれど、春一番が吹けば、水も冷たたくないような気がする。から不思議だ。

干し物を部屋に移せり日の短か

馬場美智子

冬は、洗濯物や布団など午後三時以降には干していても逆に湿つてくるのだという。主婦はそのような科学的知識を無意識のうちに会得して、一日の生活サイクルを組んでいるのである。地味な日常の生活の知恵を詠んだ。

愛の日やなすがままにと白い鳥

松下 幸恵

バレンタインデーを「愛の日」として詠んだ。一部の歳時記には季語としてあるが、まだまだ認知された季語までにはなっていない。しかし、「バレンタインデー」では正しいけれど、短詩には活用しにくい。

橙木集より

掃きよせしものより梅の香立つ

武田 美雪

ゴミだと思っていた物が実は梅の花が散つたものだったと気が付いたのは匂い。匂い立つのだから高貴な匂いであることは想像に難くない。匂い立った瞬間から、ゴミではなくなつた。クロッカス泥をつけたる花を上ぐ

田中 武彦

会員作品

六花集



浜田久美子

微笑が母との会話冬椿

生きてゐてほしかった人寒椿

春の夢もがいても詩は生まれぬ

どの猫とどの猫がペア猫の恋

知らぬ間に降つてゐたのか名残雪

林裕美子

ことり

耳にあて夢聴いてみる寒卵

寒月は叶わぬ恋に満ちにけり

逢いびきの雪を踏む音鳴りにけり

抱きとめよ胸に飛び込む雪深し

氷上に立ちぬ天女に身を変えて

凶暴な思ひ隠して愛のチヨコ

背表紙に黒髪流る春の昼

忘れ物したる思ひよ春時雨

花疲れ枕辺に置く絵本かな

あの時に選びし道よ春の風